

白澤研究の現状と課題

岡部 美沙子

はじめに

本稿の目的は、中国で誕生し、日本・朝鮮・琉球に伝播した空想上の動物である「白澤（はくたく）」について、これまで行われてきた研究を整理し、白澤研究の現状と課題を明らかにすることである。

白澤は中国から日本に伝わったが、その図像は中国と日本では大きく異なっている。中国では獅子のような姿（図1『三才図会』）と虎首龍身の姿（図2『正徳大明会典』）であるのに対し、日本では人面牛身（額に目があり背中に角があるものもある）図像（図3『旅行用心集』）が大半を占めている。一方、朝鮮には中国型の、琉球には日本型の図像が残されている。中国に朝貢し中国文化の影響を受けた朝・琉両国において違う図像が残されているということは、東アジアにおける文化の流れを考える上でもとても興味深い。

このように同じ白澤といっても、その姿・形は国・地域によって大きく異なっている。また、同じ国・地域でも、あるいは皇帝の徳を象徴する聖獣として、あるいは辟邪のシンボルとして捉えられるなど、白澤の性格は様々に変化している。こうした東アジア各地域や時代ごとの白澤像の変遷をたどり、その伝播の具体的様相や各地域における受容の形態を明らかにすることは、東アジアにおける文化の伝播・受容・変容の諸相をも解明することにつながる研究といえる。



図1 三才図会
王圻編『三才図会』（上海古籍出版社，1988年）



図2 正徳大明会典
『正徳大明会典』（汲古書院，1989年）



図3 旅行用心集
桜井正信訳『現代訳 旅行用心集』八坂書房, 2001年6月, p.90

そこで、このような研究意義を有す白澤研究に関して、その先行研究を整理し、白澤研究の現状と課題についてまとめていくことが本稿の目的であるが、その前に、まず簡単に白澤の概略を述べておきたい。

白澤の初出については『山海経』とする説と、『抱朴子』とする説の2種類がある。

『山海経』は戦国～漢時代に成立したとされる書物であり、その中に「白澤能言語出東望山有徳明照幽遠則至（白澤は言葉を話すことができ東望山に出現する。徳が明らかで深く遠くまで照らせばやってくる）」という一文があって、これが白澤の初出であるとする見解がある。ただし、この一文は現行の『山海経』には見られず、清の王仁俊が編した『玉函山房輯佚書統編三種』⁽¹⁾に引く「山海経佚文」にもとづくものである。そのため、この史料の信憑性を疑う研究者もいる。そこで『抱朴子』を初出とする見解が生じる。『抱朴子』は東晋の葛洪が撰したものである。『抱朴子』内篇の巻13「極言」に、「昔から、何も努力しないで偶然不老長生を遂げた人はいないか」と抱朴子が問われる場面がある。そこで抱朴子は「そのような人は一人もいない」と答えた上で、生まれつきの天才といえる黄帝でさえ努力をしたのだと述べている。抱朴子はその詳しい例として、黄帝が何人もの先達に教えを請い、さまざまな事柄を行ったことを細かく挙げている。その中に「窮神奸則記白沢之辞（鬼神のことを窮める時は神獣白沢の言葉を記しておき）」⁽²⁾とある。

しかし、初出についてはまだ議論の余地がある。それは戦国時代に作られたとされる「石鼓」と呼ばれる太鼓型の石に刻された「石鼓文」の記述である。

石鼓は10個あり、それぞれの表面には、「石鼓文」という中国最古の石刻文が彫られている。明の楊慎輯『金石古文』巻1「周宣王石鼓文」⁽³⁾によれば、その10個のうちの「丙鼓」（第三鼓、田車鼓ともいう）と呼ばれる石鼓の文中に「白澤」という言葉が見える。しかし、石鼓は風化などによって文字の欠損が進み、現在、北京の故宮博物院の石鼓館に保存されているものには、白澤の「白」の文字は見られない⁽⁴⁾。

いずれにしろ、『抱朴子』の記述によって白澤が遅くとも東晋の時代にはその名が確認できる。しかし、白澤について具体的に記されるようになるのは唐代になってからである。『雲笈七籤』巻100に引く唐の王瓘撰『軒轅本紀』⁽⁵⁾には中国の伝説上の帝王である黄帝が白澤と出会った話が以下のように載せられている。

黄帝狩東至海，登桓山，於海濱得白澤神獸，能言達於萬物之情。因問天下鬼神之事，自古精氣爲物，遊魂爲變者，凡萬一千五百二十種，白澤言之，帝令以図寫之，以示天下。帝乃作祝邪之文以祝之⁽⁶⁾。

(黄帝が天下を巡狩し、東海地方を回って桓山に登り、さらに海辺に赴いて、そこで白澤を手に入れた。この白澤は人間の言葉を話すことのできる神獣で、しかも万物に精通していた。そこで黄帝が天下の鬼神のことを訊ねると、白澤は大むかしから精気が化したり、さまよう魂が変じたりした合計一万一千五百二十種の邪鬼悪神についていちいち説明した。黄帝は部下に命じてそれを一つ一つ絵に描かせ、天下の人々に示して、それらの災害に遭わないようにさせた⁽⁷⁾。)

また、瞿曇悉達『開元占経』巻116に引く『瑞応図』⁽⁸⁾にも、ほぼ同じ話が載せられている。しかも、『瑞応図』には『軒轅本紀』に無い「賢君徳及幽遐則出」(優れた君子の徳が深く遠く遍及ば(白澤が)出現する)という記述がある

『軒轅本紀』や『瑞応図』の記述から、白澤の言葉をもとに黄帝が『白澤図』と呼ばれる図を作ったこと、それによって黄帝が害を除かせたこと、さらに、白澤は黄帝のような徳のある王者の前に出現する獣であると考えられていたことが明らかである。

この「白澤が黄帝のような徳のある王者の前に出現する獣である」という考え方がもととなって、中国では皇帝が行幸する際の行列である鹵簿に、「白澤旗」という旗を儀仗兵が掲げるようになる。白澤旗を鹵簿で掲げるといことは、白澤が現れるような徳が皇帝にあるということを示すという意図があったと考えることができる。

また、黄帝が白澤の言葉をもとに作ったとされる、『白澤図』という鬼神の名前などを記した書物については、『抱朴子』内篇の巻13「極言」や、同じく『抱朴子』内篇の巻17「登涉」の記述、あるいは干宝の『捜神記』の「山中の怪」という話などにその名が見られる。『抱朴子』や『捜神記』では、『白澤図』を持っていることで様々な鬼神を避けられると考えられていたことがわかる。例えば『抱朴子』内篇の巻17「登涉」では、抱朴子は「山川や廟堂にいる鬼神を避ける法」を訊ねられ、「百鬼録・白沢図・九鼎記を調べて、天下の鬼の名称を知っておれば、あらゆる鬼は自分から退く」⁽⁹⁾と答えている。

また、唐代には韋后の妹・馮七娘が「白澤枕」という枕で「魅」を避けていたという故事があり⁽¹⁰⁾、これらに表されるように、白澤は辟邪の役割を持つ存在として捉えられていたのである。

このように中国の白澤を概観しただけでも、白澤が聖獣としての性格と、辟邪の獣としての性格の二つを持っていたことがわかる。同一国内でもこのような性格の変化していく白澤像を正確

に捉えるためにも、白澤研究にはその資料が存在する中・日・朝・琉各国それぞれを研究し、比較する必要があるが、管見の限りでは朝鮮の白澤について述べたものはない。また、日本と中国で図像が異なっている理由も解明されておらず、白澤研究の大きな課題である。本論では、第一章でそれらの先行研究を取り上げ、内容を簡単に整理するとともに、第二章で白澤に関する文献・史料・図像などで特に重要であるものや、今までに紹介されていないものをいくつか挙げ、白澤研究の現状と今後の課題について述べていくこととする。

1. 白澤に関する先行研究

白澤に関する先行研究は、以下の4種に大別できる。

- ①白澤そのもの、あるいは白澤の図像について研究したもの
- ②『白澤図』、『白澤精怪図』について研究したもの
- ③白沢王（はくたおう）について研究したもの
- ④「中国の神話・伝説」、「日光東照宮の図像」、「琉球絵師の自了」など、別のテーマを主題とした研究

(1) ①「白澤そのもの、白澤図像について研究したもの」

このテーマに関して、江戸時代の国学者・屋代弘賢が著した『白澤考』と『白澤図説』にはじまり、近代以降の西岡弘「神獣白澤考」⁽¹¹⁾、熊澤美弓「『涉世録』について—「白澤避怪図」にみえる妖怪資料—」⁽¹²⁾、同「神獣「白澤」と文化の伝播」⁽¹³⁾、立石尚之「白澤のすがた」⁽¹⁴⁾、原田淑人「瑞獣白澤及び角端に就いて」⁽¹⁵⁾の諸研究をあげることができる。

屋代弘賢の『白澤考』『白澤図説』は、両書とも日本と中国の白澤についての資料を集成したものである。この二つの書は名前こそ異なっているが、内容についてはほぼ同じである。『白澤考』『白澤図説』は、屋代が見ることのできた漢籍・和書に散見する白澤に関する記載部分を抜書にして列挙したものである。それらの書目は、『大唐六典』、『黄帝内伝』、『山海経』、『瑞応図』、『抱朴子』、『従容録』、『伝燈録』、『虚堂集上林泉』、『事物紺朱』、『本草綱目』などで、また図は、雪舟筆とされる白澤の図のほか、『明人墨本（明搦墨本）』、『三才図会』、『程幼博墨苑』、『清人百獣図』の図を引用・転載している。両書に載せられている図のほとんどが散逸あるいは所在不明のものであるため、『白澤考』『白澤図説』自体が白澤研究にとって貴重な資料集であると言える。

西岡弘「神獣白澤考」は、中国と日本の白澤図像や白澤に関する資料を多数挙げ、それらに考察を加えており、白澤研究の基礎となる論文である。西岡は『軒轅本紀』『本草綱目』『三才図会』『抱朴子』『搜神記』『法苑珠林』『酉陽雜俎』『大唐開元礼』『大唐六典』『隋書』『歴代名画記』『佩文韻府』（以上中国）や日本の『延喜式』と上述の屋代弘賢の『白澤図説』・『白澤考』、五百羅漢寺の白澤像、『旅行用心集』、『安政午秋頃痢流行記』に見える白澤関係の資料を列挙し、

それらをもとにした屋代弘賢の二著の解説と、長野県戸隠山に伝わる「白澤避怪図」についての考察をする。とくに戸隠山の「白澤避怪図」の人面牛身の図像について、目が九個あることに注目し、方相氏や饕餮文といった、多目で疫病や魑魅などを避けるものを例にとり、白澤の多目の効果もそうしたものを避けるためにあるとする。

熊澤の研究は、中国・日本・琉球の三国にまたがった白澤図像の研究をしている点に特徴がある。熊澤「『涉世録』について」は、日本の多くの白澤図像に添えられている『涉世録』という書物の引用文に着目し、『涉世録』の復元を試みている。氏は『涉生録』を復元するにあたり、中国の『隋唐演技』『西遊記』『山海経図』、日本の『月庵醉醒記』、琉球の『歴代宝案』、自了筆『白澤之図』、そして E. ベルチャーの『Narrative of the voyage of H. M. S. Samarang』など、西岡が引用しなかった日本・中国・琉球の白澤関係の資料を利用している。しかし、『涉生録』がいつどこで作られた書物なのかは明らかにされていない⁽¹⁶⁾。また、細かい点を述べるとするなら、熊澤が『涉世録』の一資料として挙げている琉球絵師・自了の『白澤之図』は、贅に引用されている書物の名が『千涉世録』となっているが、それについての詳しい説明もなされていない。

さらに熊澤は「神獣「白澤」と文化の伝播」において、中国では散逸してしまった『天地瑞祥志』という書の江戸時代の写本の中の白澤の図や、唐の澄観『華嚴大疏鈔』（『大方広佛華嚴経随疏演義鈔』、『華嚴経随疏演義鈔』、『演義鈔』ともいう）、及川窟堂筆『白澤図』、宮城県黄金山神社拝殿の彫刻、『十二霊獣図巻』、琉球の蔵元絵師の画稿集といった前人が利用しなかった新資料を挙げ、人面牛身の白澤図像の発生地を考察した。氏は「敦煌文書の「十吉祥」において、牛が白澤を生むという記述を見ることができる。だが、それだけで白澤が人面牛身で伝わったと考えるのは早計に過ぎはしないだろうか⁽¹⁷⁾」と述べている。中国には敦煌文書や唐の澄観の『華嚴大疏鈔』に「牛生白澤」という記述があることを踏まえながらも、中国において人面牛身の白澤図像が見つからないことを理由に、氏は白澤が中国から伝わったのちに日本で人面牛身になったとしている。また、琉球の白澤図像については、中国や日本に比べて資料が残っていないため、文化として定着しなかったとしている。

また、熊澤は両論文で、中国の白澤図像の初出として『大明会典』を挙げているが、『大明会典』は『正徳大明会典』と『万暦大明会典』があり、図像も両者で僅かながら異なっている。正確に言うならば、現在判明している限りでは、中国における白澤図像の初出は『正徳大明会典』のものであるが、熊澤が初出として挙げている白澤の図像は『万暦大明会典』の花様の図像であるため、注意が必要である。

立石尚之「白澤のすがた」は、日本における白澤図像を「人面牛身の姿をしたもの」と『絵本写宝袋』⁽¹⁸⁾や松代藩真田家伝来の狩野尚信筆⁽¹⁹⁾のものなど「瑞獣・霊獣として描かれたもの」の二種に分類・分析するとともに、人々が白澤に求める性質によって、白澤の描かれ方が異なっていることを述べている。また、白澤が件や猿といった他の動物と互いに影響しあい、時には混同されていたことについても言及している。

(2) 『白澤図』、『白澤精怪図』について研究したもの』

このテーマに関しては、佐々木聡氏の「『白澤図』 輯校－附解題－」⁽²⁰⁾や孫文起氏の「『白澤図』 与古小説志怪淵源」⁽²¹⁾などが挙げられる。

これらの論文は、白澤の図像ではなく、現在は散逸してしまった『白澤図』という書物や、『白澤図』とは異なる系統の書であると考えられている『白澤精怪図』といった鬼神に関する書物に関して研究したものである。白澤そのものの研究というよりは、書誌研究や鬼神研究といった別の分野にまたがるものといえる。白澤の存在や白澤が持つ辟邪の性質が、いつ頃から中国において広く知られるようになったのかを知る上でも、『白澤図』や『白澤精怪図』の研究は白澤そのものの研究と密接であると言える。

(3) 「白沢王について研究したもの」

「白沢王」は「はくたおう」と呼びならわす。このテーマに関しては、岸文和「魔除けのメディア学－白沢王の絵はいかにして鬼を鎮めることができるか」⁽²²⁾や、家永三郎『上代倭絵全史』⁽²³⁾などがある。

白沢王は平安時代に清涼殿の鬼間（おにのま）に描かれていたものであるが、その図像については、白澤を擬人化したものであるとか、インドの波羅奈国の「縛多王」であるとする説があり、いまだ解明されていない。しかし、白沢王の図像は鬼を切るものであったことがわかっており、鬼を切るという行為は白澤の辟邪の特徴に沿っていると考えることができる。また、清涼殿という天皇の起居する建物に描かれていたことから、王者の徳を象徴するといった点でも、白澤の性質に即しているため、白沢王が白澤を基にしたものである可能性は大いに考えられる。その場合、白沢王は日本の平安～鎌倉時代の白澤研究の重要な資料となる。また、白沢王は江戸時代に近松門左衛門の「鎌田」「天智天皇」などの諸作品にもみられるため、そうした文学作品の研究が進むことで、白沢王についても解明されるかもしれないが、現在は文学研究の側からのアプローチはなされていないのが現状である。

(4) その他のテーマ

まず神話や伝説について述べたものとして、伊藤清司『中国の神話・伝説』⁽²⁴⁾と袁珂『中国の神話伝説 上』⁽²⁵⁾がある。両者はともに中国の黄帝伝説の一端として、黄帝と白澤の話載せているが、白澤について詳しく研究しているわけではない。伊藤は『中国の神獣・悪鬼たち－山海経の世界』においても、白澤について触れている。この他、澤田瑞穂『中国の呪法』⁽²⁶⁾は、中国で行われていたさまざまな呪法や厭勝の一つとして唐の韋後の妹の「白澤枕」の話を紹介している。

日光東照宮の図像研究としては、高藤晴俊『日光東照宮の謎』⁽²⁷⁾が挙げられる。高藤は、日光東照宮拝殿の法親王着座間に描かれた狩野探幽筆の「白澤の図」（図4）について考察を加えている。東照宮の「白澤の図」は、拝殿の麒麟の図と対になる形で描かれており、高藤はそれについて、

東照宮の拝殿の左右に、いわば善政のシンボルでもある麒麟と白澤が描かれたということは、軽視するわけにはいかない。当然、東照宮の祭神・徳川家康こそが、麒麟や白澤の出現する政治家である、との意味があろう⁽²⁸⁾

として、徳川家康が善政を行った人物であることを示すために拝殿に麒麟と白澤を描いたと考えている。さらに高藤は、白澤の図が描かれた拝殿という場所にも着目している。江戸時代、正式に拝殿で拝礼が許されたのは大名であり、旗本は拝殿手前の御縁、御目見得以下の御家人は階段下が拝礼の場であったことを踏まえ、高藤は「大名は一国一城の主、その国の政治の責任者である。したがって、大名たちにも「自国でも麒麟や白澤が出現するような政治を心掛けよ」との政治理念を表したものと見えよう」と述べている⁽²⁹⁾。つまり、白澤の図を描くことは、将軍の徳を示すためだけでなく、その図を見た大名たちにも善政を促す目的があったということになる。他者に善政を促すために描くということは、他に例がなく、日光東照宮の白澤の図の独自の性質と解釈できる。

また、琉球の絵師である自了（1614年－1644年）が描いた『白澤之図』については、佐藤文彦『遙かなる御後絵－甦る琉球絵画－』⁽³⁰⁾や、沖縄タイムス社より出版された『沖縄美術全集4』⁽³¹⁾で詳しく述べられている。佐藤は『遙かなる御後絵－甦る琉球絵画－』の第5章で、自了について考察している。自了は琉球の記録の上での最古の絵師とされており、現存している作品はわずかしかない⁽³²⁾。その作品の一つとして『白澤之図』があるため、この第5章で『白澤之図』を自了の一作品として取り上げる形になっている。佐藤は白澤の描き方よりも、その図の上に添えられた賛文について詳しく考察している。『白澤之図』の賛は左起こしで書かれており、これは、右から左へ移っていく通常の書法に逆らう形となっているため、「絵の方が白澤という神獣であることから何か呪術的な表現法であるかもしれない」⁽³³⁾としている。

『沖縄美術全集4』では、神山泰治が「琉球絵画 前近代の流れ」という題で王朝絵画の絵師として自了を取り上げている。それによれば自了は、「中国絵画の影響を受けた画家で、特に私淑したのは梁楷である」⁽³⁴⁾とされ、さらに自了の作品については「『白澤之図』は南宋画の院体

画の流れをくみ、その他の四点からは禅余水墨画の流れを感じさせる」⁽³⁵⁾としている。つまり、神山の論によれば、自了と彼の絵画は中国絵画の流れをくんでいるということになる。

また、劉釗の「睡虎地秦簡“詰”篇“詰咎”一詞別解」⁽³⁶⁾は、秦簡の“詰”篇の“詰咎”の文字などを詳しく分析しているが、劉氏はこの論文で“詰”篇が『白澤図』の類のものであることを明らかにしている。そして、この論文で興味深い点は、石鼓文にもみられる白澤の「澤」の異体字についても、言及していること



図4 日光東照宮の狩野探幽筆の白澤
高藤晴俊『日光東照宮の謎』講談社
1996年3月, p.170

である。

以上のように簡単に白澤に関する先行研究を概観してきたが、こうした先行研究がある中で、それでもいまだ明らかになっていない問題が存在する。今、それを以下に列挙してみる。

第一に、人面牛身の白澤の図像がどこで発生したのか、という問題である。決定的な資料が見つかっていないため、人面牛身の発生は中国とも日本ともしがたいのが現状である。熊澤は、現存する人面牛身の白澤の図像資料が日本と琉球だけに残っていること、日本では人面獣身の白澤の記述が室町時代の資料にすでにあるが、琉球では自了の資料以前に白澤に関する資料がないこと、さらに、もとは中国の書である『天地瑞祥志』の人面牛身と思しき姿の白澤の図が転写を繰り返したことで、それまでにすでに日本に存在していた人面牛身の白澤図像の影響を受けた可能性があることの三点から、「白澤は、中国より日本に渡ってから、獣の姿より人面獣身の姿に変容し、なおかつその姿で日本から琉球に入ったのではないだろうか」と推論を立てている⁽³⁷⁾。

熊澤がここで述べている「獣の姿」はあいまいな表現で、「牛の姿」とも「獅子の姿」とも取ることができる。しかし、牛と獅子では大きく異なる意味を持つ。牛の姿で入ってきたのであれば、牛身の発生地は中国ということになるが、獅子の姿で入ってきたのであれば、牛身の発生地は日本ということになるからである。この点について、筆者は虎首龍身や獅子型の白澤の他に「牛身」の白澤も中国で発生し、それが日本に伝播したのではないかと考えている。それは、敦煌文書の「十吉祥」のほかに、唐の澄観の『華嚴大疏鈔』にも牛が白澤を生むという記述がみられるからである。確かに中国において人面牛身の図像は見つかっておらず、牛と白澤を結びつける文献資料も、今のところ中国では「十吉祥」と『華嚴大疏鈔』の二つしかない。しかし、この二つの資料が仏教資料であるということが大きな意味を持っているのではないだろうか。

例えば、日本の白澤資料において「人面身獣」という言葉が初めて見られる文献は、室町時代の一色直朝（生年不詳～1597年？）の『月庵醉醒記』であるが、その記述からは仏教と白澤の関連がうかがえる。以下はその文である。

白沢は、人面身獣にして如牛。世人は悪夢を食様にいへども、一切物怪を避けると云。七声を念ずれば災禍悉消滅云々。『伝燈録』在之。七声は、弥陀名号七反唱事也⁽³⁸⁾。

注目したいのは、『伝燈録』在之』としていることである。『伝燈録』とは北宋の道原撰『景德伝燈録』のことで、この巻16元安禪師の条に「白澤之図」について以下のような記述がみられる。

師曰。家有白澤之図、必無如是妖怪。（保福別云。家無白澤之図、亦無如是之怪）⁽³⁹⁾

（師が、家に白澤之図があるので、このような妖怪はいないと言った。（保福は「家に白澤之図はなく、このような妖怪もない」と言った。））

『景德伝燈録』は禅宗の系譜やインド・中国の諸師の伝記を記した仏教書であり、劉釗によれ

ば、『景德伝燈録』の他にも中国の禅宗語録などに「白澤之図」についての記述がいくつかみられるようである⁽⁴⁰⁾。ただし、ここで注意しなければならないのは「白澤之図」という言葉が、書物の『白澤図』を指すのか、「白澤を描いた図」を指すのか定かではないことである。

いずれにせよ、日本において白澤を初めて「人面獸身」で「牛如」と記述した一色直朝は、そうした仏教と関連するものとして白澤を捉えていたことは確かである。

さらに、もし雪舟が本当に白澤を描いていたとするなら、白沢王を除く日本の白澤の図像の初出となるものは、その雪舟の人面牛身の図像であり、しかもそれが雪舟という禅宗の「画僧」によって描かれたことになる。これは、偶然の一致なのだろうか。雪舟が中国へ渡った際に、すでに中国内、特に仏教関係者の間では牛身の白澤が広く認知されており、それを雪舟が学んだ可能性がないとは言いきれない。同じく禅宗の画僧である白隠（1685-1768）も人面牛身の白澤の図を描いており、さらに、探幽縮図によれば同じく禅宗画僧の雪村（1504?-1589?）も人面牛身の白澤図を描いていたようである⁽⁴¹⁾。また、伊藤若冲の白澤の図には、大徳寺の僧が賛を添えていることも興味深い。

しかし、これだけの資料では推測の域を出ず、さらには日本の白澤図像に特徴的な人面や、額と脇腹の目、背中の角などがどこから生じたのかが定かではない。日本に残る白澤資料の古いものには先述の一色直朝『月庵醉醒記』の「人面牛身」という言葉や天文16（1547）年頃に編纂されたと考えられる国語辞典『運歩色葉集』に「人面四足」という言葉が見られる⁽⁴²⁾ことから、16世紀にはすでに人面牛身の白澤図像が定着していたと考えられる。また現存する古い白澤図像にも人面牛身のものがある⁽⁴³⁾ことから、日本においては白澤図像が描かれ出したころにはすでに人面牛身のものがあったということだけが確実に言えることである。

このように決定的な資料にかけているため、中国における牛身の白澤図像が人面を備えており、それが日本に伝わった可能性と、熊澤の指摘するように、日本で独自に人面が付加された可能性、さらに牛身の白澤そのものが中国ではなく日本で図像化された可能性の三つがまだ残されている。

そこで人面牛身の発生地を探る鍵となるのが、先ほど述べた仏教との関係である。人面牛身の白澤図像を分類してみると、仏面ともとれるものがいくつかあるのである。例えば雪舟の白澤図は仏像にみられる宝髻を結び、緊箍児のような装飾品を付けている。他にも宝冠帯、宝珠などの仏像特有の装身具・仏具を身につけた図像がある。さらに日本の白澤図像の特徴ともいえる額の目は、明王像などにみられる第三眼ととらえることもでき、仏像と同じ装飾が施されていることがわかる。こうして見てみると、図像的にも、白澤と仏教の関係を見ることができると言えるのではないだろうか。特に宝髻を結っているものを挙げてみると、雪舟の白澤の図と、雪村の白澤の図（これは宝髻というより肉髻に近い）、『光琳百図』のものに喜多村信節の『筠庭雜録』、自了の『白沢之図』、『八重山蔵元絵師画稿集』の図、『ベルチャー航海記』の図など、意外と数は少ない。そして、これらの宝髻を結っている白澤図像は、宝冠帯や宝珠といったものとセットで描かれており、そうした仏面の要素を持った顔は、複数の仏像的装飾を施したことからみても、意図的に仏面を作ったと考えることができる。そうした装飾を分析し、どこの国のどのような仏

像装飾の特徴を有しているのかがわかれば、人面の発生した地域の特定も可能になるかもしれない。たとえ発生地を特定できなかったとしても、そうした装飾という新しい観点で白澤図像を分類することで、日本国内の白澤図像の系統を明らかにすることが可能であると考えられる。

その上で、二つ目の課題として、中国の白澤図像資料のさらなる発見が必要になってくる。中国においては、日本に比べ白澤の図像資料がとてもし少ない。しかも、人面牛身のものは全く見つかっていない。前述した両『大明会典』のような公的な資料や、『三才図会』などがわずかに残っているものの、民間の白澤資料が見つからないといえる。辟邪という白澤の持つ性質を考えると、もっと民間に広まってもおかしくないはずである。さらに、立石氏が示しているように、日本においては辟邪の性質を持つ白澤は人面牛身で描かれており、中国でもそのような可能性があるのではないだろうか。そのため、今後は現地の博物館を始めとする現地調査を行い、文字資料だけでなく図像資料の収集にも力を入れなければならない。図像の数が増えれば、中国の白澤図像の比較研究も容易になり、さらにもし中国で人面牛身、あるいは牛身の白澤図像が見つければ、人面牛身の発生地について論証する上での確実な証拠となりうる。

三つ目の課題は、琉球への白澤図像の伝播の経路を明らかにすることである。もし中国で人面牛身の白澤図像が発生していた場合、朝貢などによって交流のあった中国から、人面牛身図像が伝わる可能性は高い。現に、琉球絵画の研究者は自了が中国絵画の影響を受けたことを示している。しかし、逆に日本から琉球に人面牛身の白澤図像が伝わったとなると、可能性としては薩摩侵攻後、薩摩を介した日本との交流経路が確立したことによってということになる。だが、その考えは現時点では推測の域を出ず、本当にその経路で伝わったことを証明しなければならない。

四つ目の課題は、朝鮮における白澤図像である。現在韓国では「白澤旗」や「白澤胸背（ペクテクヒョンベ）」、さらには獅子舞の一種として「白澤舞」の資料が残されているにもかかわらず、それについて論じた日本の先行研究は無い。白澤の伝播の流れを知る上でも、この「朝鮮の白澤」を分析する価値は大いにある。

五つ目は先行研究に限らず、白澤とその他の動物が混同されており、きちんと「白澤」として認識されていなかったという問題が挙げられる。日光東照宮の白澤図や五百羅漢寺の白澤像が猿と混同されて来たという例もあるように、そうして混同されているケースが他にもある可能性が高い。そこで章を改め、これまで白澤と捉えられてこなかったが、筆者が白澤だと考えているものについても述べていきたい。

2. 白澤に関する資料

(1) 中国の白澤

中国では唐代から皇帝の大駕鹵簿に「白澤旗」という旗を用いるようになった⁽⁴⁴⁾。この白澤旗は、皇帝が黄帝のような徳のある人物であることを表す、いわば象徴的な意味を持つものであったと考えられる。

また、黄帝は白澤の言葉をもとに、『白澤図』という鬼神の名前などを記した書物を作ったと

され、葛洪『抱朴子』などから、その『白澤図』を持っていることで様々な鬼神を避けられると考えられていたことがわかる。この『白澤図』に代表されるように、白澤は辟邪の役割を持つとみなされるようになっていく。また、明代になると、白澤は官服の刺繍飾りの「花様」「補」の意匠として用いられるようになったことが、正徳・万暦両大明会典や『三才図会』などからうかがうことができ、中国における白澤図像の貴重な資料となっている⁽⁴⁵⁾。唐～宋代には儀衛や儀仗の兵が「白澤繡」の入った服や「白澤袍」をいう袍服を着ていたが、『大明会典』に示されている通り、明代には麒麟と並んで公侯駙馬伯の官服の刺繍飾りとなっている。前者を皇帝の兵と捉えれば、白澤繡や白澤袍は白澤旗と同様、皇帝の徳の象徴とみなすことができるが、後者では、白澤が臣下や駙馬伯の位を表すものとなって、格が一段下がってしまうことになる。

唐代にはすでに『大唐六典』において、神獣や祥瑞を「大瑞・上瑞・中瑞・下瑞」の四段階に分類しており、白澤は『大唐六典』で「大瑞」と位置づけられ、麟・鳳・鸞・神龜・龍などとともに挙げられている。それほど位の高い瑞獣がなぜ明代では皇帝の服ではなく公侯駙馬伯の官服に用いられるようになったのかは明らかではない。

この他、中国において白澤は「白澤燈」という燈籠にも用られたり、『西遊記』などでは「白澤獅」という名で、孫悟空たちの敵役となっている。

中国における白澤図像は、『三才図会』や『西遊記』などからうかがえる獅子型（図1）と、両大明会典に載っている花様のような虎頭龍身のもの（図2）の二種に大別できるが、両者には角が2本描かれている点や手足は爪の生えた肉食獣の足をしている点、さらに、腋下や手足から炎のようなものが出ているという共通点もある。

中国の白澤図像は書物などに描かれたものしか注目されてこなかったが、近年明代の墓の発掘に伴って、白澤補の現物資料が出土している。しかし、日本の先行研究ではそれについて触れられて来なかった。それは、発掘調査の報告書において、白澤が麒麟と間違われていたために、知られていなかったということが理由として挙げられる。

その出土資料というのが、明の徐備の墓から見つかった白澤補である。「明徐達五世孫徐備夫婦墓」⁽⁴⁶⁾によれば、徐備は1465年（成化元年）に魏公に奉ぜられ、1517年（正徳12年）に68歳で亡くなっている。墓の調査をした南京市文物保管委員会と南京市博物館によれば、徐備の棺内から麒麟の補の付いた補服が見つかったとされている。補服の補が麒麟と判断された理由は、徐備が亡くなった正徳年間、『正徳大明会典』巻58官服2文武官冠服の「常服」の項に「公侯駙馬伯麒麟白澤」とあることからわかるように、「公」の位の者は官服に麒麟か白澤の補をつけることが定められていたためである。徐備は「魏公」であったので麒麟か白澤の補をつけていたはずであるが、しかし、どういうわけか麒麟の補であると断定されている。

『正徳大明会典』に載せられている白澤と麒麟の図像の決定的な違いは、両者の脚にある。麒麟が蹄の付いた脚であるのに対し、白澤は獅子のような爪の生えた肉食獣の脚をしている。その基準に照らし合わせてみると、明らかに徐備の墓から見つかったものは白澤の図像をしているのである。

さらに清代の補子も中国で出土している⁽⁴⁷⁾。中国の少ない図像資料を補うためにも、こうし

た出土資料の調査・研究が必要である。

(2) 日本の白澤

日本における「白澤」という言葉の初出は平安時代の『延喜式』である。これは中国の『大唐六典』を引用したものと考えられている。また、平安時代には清涼殿の鬼間に白沢王の絵が描かれているが、どのような図像であったかは定かではない。

日本における白澤図像は、雪舟が描いていたとすれば、それが最も古い人面牛身の白澤図像となると考えられるが、東京国立博物館に所蔵されている雪舟の白澤の図を模写したとされる狩野派の摸本と、屋代弘賢『白澤考』に「雪舟筆」として載せられた白澤の図が存在するのみで、実物は見つかっていない。現存しているものの中で最も古いものは、先述の内藤記念くすり博物館所蔵の白澤画であるが、正確な制作年代は不明である。

一方、獅子型で描かれた白澤の図像では、室町時代に描かれたと考えられている『十二霊獣図巻』の図がある⁽⁴⁸⁾。こちらの図は、白い体に二本の角を持った姿で描かれており、中国の『三才図会』の白澤の図と似た姿である。『十二霊獣図巻』の図は着色されており、その色は体毛が白色で、四肢から赤い火炎のようなものが立ち上がっている。

この白色の図像は、狩野派の白澤図像にも見られる。狩野派は粉本主義によって、固定した図像を師から弟子へと受け継いでいるため、白澤の姿は時代が変わっても同じように描かれているはずである。それは、日光東照宮の狩野探幽の白澤図像と、探幽の弟の狩野尚信の白澤図像と同じ「白い獅子」のような姿で描かれていることからもうかがえる。しかし、こうした獅子型の白澤図像は、白澤として認識されていない可能性が高い。たとえば、東京国立博物館所蔵の狩野探幽の『飛禽走獣図』にも、白色で四肢から火炎のようなものが立ち昇る獅子のような獣が描かれているが、河野元昭「日光東照宮と狩野探幽」によれば、その獣を「白い麒麟」としている⁽⁴⁹⁾。しかし、この獣の四肢が蹄ではなく爪の生えた肉食獣の脚であること、探幽の他の麒麟の絵は蹄で描かれていることを踏まえても、それが麒麟ではなく白澤である可能性が高い。狩野派の図像を調べれば、獅子や麒麟など、別の動物と認識されている白澤の図像がさらに見つかるのではないかと考えている。

人面牛身の白澤図像で、今まで先行研究で取り上げられなかったものとしては、宮城県塩釜市の塩釜神社に残されている、文化年間の燈籠がある。この燈籠は仙台藩主伊達周宗によって寄進されたものであり、白澤の図像が江戸時代に東北地方まで伝わっていたことを示す、貴重な資料であるといえる。

その他、『六角堂義満院仏画粉本』の白澤図、清水九太夫作の瓦、吉村周山『画英』の白澤避怪図、愛知県犬山市魚屋町の車山の水引幕、大日本行程大絵図など、素材・用途の異なるいくつかの人面牛身の白澤図像が挙げられる。日本においてこうした資料は比較的多く見つまっているが、いずれも江戸時代のもものが多く、人面牛身の白澤図像の発生を明らかにするためにも、江戸以前の資料の発見が待たれるのが現状である。

(3) 琉球の白澤

琉球における白澤資料としては、まず『歴代宝案』の「白澤補」の記述があげられる。『歴代宝案』によると1428年に明の皇帝より琉球国王尚巴志へ「織金胸背白沢緑一匹」が贈られており、これ以降にも数回、白澤補が贈られていた記述がみられる。しかし、白澤補は琉球国王だけでなく尚徳王・尚円王の王妃にも贈られていたようである。

図像史料としては自了が描いた「白澤之図」が現存する琉球史料の中で最も古い。自了の「白澤之図」は人面牛身の図像であり、この他、八重山地方の蔵元という行政機関に属していた絵師の画稿集である『八重山蔵元絵師画稿集』にも、人面牛身の白澤図像が残されている。また、こうした蔵元の絵師によって描かれた白澤の図を、1843年に先島に来航したE. ベルチャーが垣間見る機会があったようで、自身の航海日記の中に写している⁽⁵⁰⁾。17世紀初頭に首里で活躍した自了から、200年を隔てた19世紀の八重山にまで人面牛身の白澤図像が伝わっていたことは、琉球王朝のなかで白澤の図像が確実に受け継がれてきたことを物語っている。

一方、熊澤が「神獣「白澤」と文化の伝播」の中で指摘しているように、『歴代宝案』に見られる白澤補は、明朝より頒賜された品であるため、当然両『大明会典』にみられるような、虎首に鱗のある獅子のような体をした白澤図像であったと考えられる。しかしこちらは『歴代宝案』の明代の記録にしか見ることができず、明らかに人面牛身の白澤図像の方が琉球では定着していたといえる。

(4) 朝鮮の白澤

朝鮮には、中国の白澤資料と同じ系統の白澤資料が残されている。『高麗史』巻72志26輿服の鹵簿の条には、白澤旗、白澤大旗、白澤中旗の記述が見られる。これは中国の皇帝鹵簿を模したものだと考えられる。しかし、白澤旗は王の鹵簿のほか、『高麗史』では王太子鹵簿に、『国朝五礼儀序例』では王妃鹵簿に、『国朝五礼序例』では王世子鹵簿に、『国朝統五礼儀序例』でも同じく王世子鹵簿に用いられた記述もある。

白澤旗は『国朝五礼儀序例』などに図が載せられているほか、現在、国立古宮博物館に実物が展示されている。これらの白澤旗の図像は、鱗のある獅子型をしており、中国の白澤図像の流れをくんでいる。

また、『李朝実録』（『朝鮮王朝実録』）の端宗2年12月の条には「諸君（皇太子以外の王子）」の官服の胸背を白澤と制定したことが記されている。1742年に秦再奚によって描かれた延祜君の肖像画では、朝鮮王朝第19代国王の肅宗の第二王子、つまり「諸君」である延祜君が白澤胸背の付いた官服を着ている。王ではなく王子の官服の意匠になってしまったという点は、「有徳の王者の徳を表す」という白澤の持つ本来の性質から外れてきている。

この他、朝鮮では獅子舞の一種として「白澤舞」があったことがうかがえる。신명숙「韓国獅子舞의 変遷史」⁽⁵¹⁾によると、高麗末期の官僚であり儒家の李穡（1328年－1396年）は号を牧隱といい、牧隱が「驅儺行」という追儺の儀式を詠んだ漢詩のなかに「舞五方鬼踊白澤」という言葉が見られる。

白澤舞は他の三国には見られないものであるが、白澤を獅子の一種に位置付けている点や、「追雛の儀式」という辟邪の観点から見ると、やはり中国の白澤の流れをくんでいるといえなくもない。

いずれにしろ、朝鮮の白澤については資料調査も含め、研究の余地が大いにあるため、今後の課題としたい。

おわりに

白澤研究を今後進めるにあたり、やはり重要となってくるのが新出資料の発見と、今まで明らかにされてきた資料の整理である。中国においては白澤の図像資料が少ないため、人面牛身の資料があるのかも含めて、きちんと調査しなければならない。日本の白澤資料は系統立てて整理されておらず、また、江戸時代以前の資料が少ないため、江戸以前の時代の資料の発見が課題である。

さらに、日本や琉球の白澤図像を考察する際に、資料そのものだけではなく、それを制作した人物が、どのような立場にある人間だったのかということにも留意しなければならない。雪舟や自了、あるいは狩野派の絵師たちの描いた白澤の図を白澤研究の中に位置づけるためには、彼らの作品そのものだけではなく、彼らがどのような立場の人物であったかを考慮することで、作品の位置づけが変わってくるからである。たとえば、雪舟は単なる絵師ではなく、禅画僧であり、中国へも渡った人物である。単に彼の作とされる白澤図像が人面牛身であることを取り上げたのでは、人面牛身の図像の発生地は明らかにできない。彼がどのような人物で、どのように絵画を学んだのかといった経緯を踏まえることで、初めて「雪舟の白澤の図」がどのような意味を持つ作品なのかを明らかにできると筆者は考えている。同じことが、自了にも言える。白澤の研究者は、自了の白澤の図が人面牛身であることだけに着目し、琉球の白澤図像が日本の流れを汲むと考えている。逆に、琉球絵画の研究者は、絵の描き方から白澤の図を中国の流れをくむものとして位置付けている。しかし、白澤図像の伝播の流れを考える上では、そのどちらの視点も備えつつ、自了という絵師の立場を鑑みたくえて、初めて「自了の白澤の図」を位置づけることができるのではないだろうか。

第1章で述べたとおり、白澤研究には依然として多くの課題が残されており、今後その解明が求められる。

注

- (1) 王仁俊輯『玉函山房輯佚書続編三種』、上海古籍出版社、1989年9月
- (2) 尾崎正治他『鑑賞中国の古典第9巻 抱朴子・列仙伝』角川書店、1988年7月、pp.75-76
- (3) 『石刻史料新編』、新文豊出版公司、1977年12月
- (4) 清代の王旭著『金石萃編』や李調元編『金石存』ですでに「白」の文字を見ることができなくなっている。また、「澤」の文字については、「澤」ではなく「𣶒」など別の文字であるとする資料もあり（徐寶貴『石鼓文整理研究 上』（中華書局、2008年1月）の10章「石鼓文字講釈」p.821参照）、石

- 鼓文に刻された文字が「白澤」ではない可能性もある。
- (5) 張君房撰『雲笈七籤』中華書局, 2003年12月
 - (6) 前掲『雲笈七籤』p.2177
 - (7) 伊藤清司『中国の神話・伝説』, 東方書店, 1996年9月, p.99
 - (8) 瞿曇悉達『開元占経』卷116 獸占 (『秘書集成』 團結出版社, 1994年6月, p.440)
 - (9) 葛洪著, 本田濟訳『抱朴子内篇』平凡社, 1990年1月, p.367
 - (10) 『旧唐書』卷37「五行志」および『太平広記』卷288「妖妄2・馮七姨」参照。
 - (11) 西岡弘「神獸白沢考」(『國學院短期大学紀要』16, 國學院短期大学, 1998年)
 - (12) 熊澤美弓「『涉世録』について-「白澤避怪図」にみえる妖怪資料-」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第8号, 愛知県立大学大学院国際文化研究科, 2007年)
 - (13) 熊澤美弓「神獸「白澤」と文化の伝播」(『愛知県立大学文字文化財研究所年報』第3号, 2010年3月)
 - (14) 立石尚之「白澤のすがた」(大島建彦編『民俗のかたちとこころ』岩田書院, 2002年3月)
 - (15) 原田淑人「瑞獸白澤及び角端に就いて」(『東亜古文化研究』座右實刊行會, 1941年)
 - (16) 2011年11月19日 東アジア怪異学会(於キャンパスプラザ京都)で佐々木聡氏にお会いし, 同氏より『涉世録』は宋代に中国で書かれた書であることが明らかになったことをお聞きした。
 - (17) 前掲 熊澤美弓「神獸「白澤」と文化の伝播」p.52
 - (18) 古河歴史博物館特別展図録『天変地異と世紀末-日本人の災害観・終末観』(古河歴史博物館, 1999年10月)に橋有税『絵本写宝袋』の澤獸の図が掲載されている。
 - (19) 『真田宝物館収蔵目録-絵画4-』(松代藩文化施設管理事務所, 2000年3月)p.19に狩野尚信筆「白沢図」が掲載されている。また, 前掲『天変地異と世紀末-日本人の災害観・終末観』にも同図が掲載されている。
 - (20) 佐々木聡「『白澤図』輯校-附解題-」(『東北大学中国語学文学論集』第14号, 東北大学中国文学研究会, 2009年11月)
 - (21) 孫文起「『白澤図』与古小説志怪淵源」(『哈爾濱学院学報』第28卷第10期, 2007年10月)
 - (22) 岸文和「魔除けのメディア学-白沢王の絵はいかにして鬼を鎮めることができるか」(『美術フォーラム21』第6号, 醍醐書房, 2002年6月)
 - (23) 家永三郎『上代倭絵全史』名著刊行会, 1946年10月
 - (24) 伊藤清司『中国の神話・伝説』東方書店, 1996年9月, p.99.
 - (25) 袁珂『中国の神話伝説 上』青土社, 1993年4月, p.196.
 - (26) 澤田瑞穂『中国の呪法』平河出版社, 1984年12月
 - (27) 高藤晴俊『日光東照宮の謎』講談社現代新書, 1996年3月
 - (28) 前掲 高藤晴俊『日光東照宮の謎』p.171.
 - (29) 前掲 高藤晴俊『日光東照宮の謎』pp.171-172.
 - (30) 佐藤文彦『遥かなる御後絵-甦る琉球絵画-』作品社, 2003年9月
 - (31) 沖縄美術全集刊行委員会編『沖縄美術全集4』沖縄タイムス社, 1989年11月
 - (32) 前掲 佐藤文彦『遥かなる御後絵-甦る琉球絵画-』は, 自了作と伝えられている作品は十数点知られているとしている。『白澤之図』を所有する海洋博覧会記念公園管理財団によると, 落款などから確実に自了の絵であるといえる作品は『白澤之図』だけのようである。
 - (33) 前掲 佐藤文彦『遥かなる御後絵-甦る琉球絵画-』p.104.
 - (34) 神山泰治「琉球絵画 前近代の流れ」(前掲『沖縄美術全集4』)p.93.
 - (35) 前掲 神山泰治「琉球絵画 前近代の流れ」p.93.
 - (36) 劉釗「睡虎地秦簡“詰”篇“詰答”一詞別解」(簡帛研究 <http://www.bamboosilk.org/>)
 - (37) 前掲 熊澤美弓「神獸「白澤」と文化の伝播」p.58.
 - (38) 服部幸造等編『月庵醉醒記』三弥井書店, 2008年9月, p.103.

- (39) 道原撰『四部叢刊三編 景德伝燈録』商務印書館, 1935年9月
- (40) 前掲 劉釗「睡虎地秦簡“詰”篇“詰咎”一詞別解」に「在禪宗語録中, 也常見有“家無白澤図, 妖怪自消除。”“不懸肘後符, 何貼白澤図。”“家無白澤図, 有如此妖怪”一類的語録。」とある。
- (41) 京都国立博物館編『探幽縮図』下巻, 同朋舎出版, 1981年5月, p.157.
- (42) 『運歩色葉集』は京都大学所蔵の元龜2年本と天正17年本がある。『元龜二年京大本 運歩色葉集』(京都大学文学部国語学国文学研究室編, 臨川書店, 1966年12月)の解題によると、『運歩色葉集』の成立は元龜本・天正本両書の序文末に「天文十七年」とあることから明らかであるとされている。
- (43) 内藤記念くすり博物館所蔵の白澤の図(青木允夫・古田恵子編『目で見るとくすりの博物誌』内藤記念くすり博物館, 1982年12月所載)が, 制作年代が室町~戦国時代のものでされており, 日本の白澤図像の中では古い部類に入る。
- (44) 『大唐開元禮』巻2「大駕鹵簿」(汲古書院, 1972年12月, p.20.)
- (46) 『正徳大明会典』巻58「官服2・文武官冠服常服」(汲古書院, 1989年6月, p.54), 『万曆大明会典』巻61「冠服2・文武官冠服常服」(文海出版社, 1964年3月, p.1059)『三才図会』巻2「衣服」(上海古籍出版社, 1988年6月, p.1530)
- (45) 『文物』1982-2.
- (47) 2001年安徽省碭山縣で発見された清代の女性の墓から, 白澤の補子の付いた服が発掘されている。
- (48) 玉虫敏子「十二霊獣図巻」(『國華』國華社, 1998年5月)
- (49) 河野元昭「日光東照宮と狩野探幽」(『日光東照宮の文様』ふたば書房, 1980年3月) p.337
- (50) 安積鋭二訳「サマラン号の八重山来航記」(『八重山文化』第5号, pp.35-36, 東京・八重山研究会, 1977年5月)
- (51) 신명숙「韓國獅子舞의 變遷史」(『체육사학회지 (Korean Journal of History Physical Education Sports, and Dance)』Vol.7 2001)

(関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程)